特約店限定特典

小さな花束

夜遅く帰宅したフィリアを、メイナードが出迎えた。

「お帰り、フィリア」

「ただいま戻りました、メイナード様」

フィリアはにこやかに答えたものの、隠し切れない疲れが滲んでいる。そんな彼女に、メイナードは心配そうに尋ねた。

「最近、帰りが遅い日が続いているね。今日も忙しかったのかい？」

「少しだけ。でも、大丈夫です。明日は、仕事は休みですし」

慌ただしい日々を過ごして、ようやく休みを迎えるところだった。

メイナードの表情が、少し和らぐ。

「それならよかった。それにしても、あまり無理はしないようにね」

「はい。いつもお気遣いありがとうございます」

メイナードは、心配そうにフィリアを見つめた。

（口ではそう言っているが……フィリアは、かなり疲れが溜まっているのではないだろうか）

フィリアの仕事に対する熱意や責任感の強さを、メイナードはよく知っている。彼女のずっしりと重い鞄を受け取りながら、メイナードは口を開いた。

「もし僕にできることがあれば、何でも言ってほしい」

「ふふ。そのお気持ちだけで、十分過ぎるくらいに嬉しいです」

メイナードを見上げたフィリアが、はにかむように笑う。

「こうしてメイナード様に出迎えていただけるだけで、疲れなんて飛んでいくような気がしますから」

（……フィリアは本当に可愛いな）

愛しさが胸に込み上げてくるのを感じながら、メイナードは健気なフィリアを思わず抱き締めた。

「明日はゆっくり休めるといいね」

「はい。のんびり過ごせたらと思います」

メイナードの温かな腕に包まれて、フィリアはほんのりと頬を染めた。

＊＊＊

翌朝、フィリアが重い瞼を持ち上げると、心なしか、部屋の中がいつもよりも明るいような気がした。

（……寝過ごしてしまったのかしら）

どうやら、普段より、朝陽が高く昇っているようだ。幾度か瞬きをしてから身体を起こすと、ベッドの隣にはメイナードの姿がなかった。

メイナードがそっとベッドを抜け出していたことは、微かに記憶に残っている。フィリアを起こさないようにと、静かに起き出したようだ。

少しだけ寂しく思いながら、フィリアはぼんやりと窓の外を眺めた。このところ忙しかったせいか、身体には抜け切らない怠さが残っている。

メイナードに勧められた通り、今日はゆっくり過ごそうと考えたフィリアの目が、窓の外にいる人影を捉えた。

「あら、あそこにいるのは……メイナード様？」

朝の庭に出て、屈んで何かをしている様子のメイナードの姿を、フィリアは不思議そうに眺めた。

「何をしていらっしゃるのかしら……？」

程なくして、庭からメイナードが見えなくなったかと思うと、それから部屋のドアがゆっくりと開いた。部屋の中を覗き込んだメイナードと、フィリアの目が合う。

メイナードはフィリアに微笑みかけた。

「おはよう、フィリア。よく眠れたかい？」

「メイナード様、おはようございます。つい寝過ごしてしまったみたいです」

「たまには、そういう日があってもいいんじゃないかな」

優しくそう言ったメイナードが手にしているものに気付いて、フィリアが目を瞬く。

「メイナード様、それは……？」

「ああ、君に渡したいと思って」

メイナードが手に持っていたのは、小さな花束だった。

「わあ、素敵な花束ですね！」

顔を輝かせて、フィリアは手渡された花束を見つめる。素朴だけれど可愛らしい色合いで、良い香りがふわりと漂ってくる。

「もしかして、メイナード様はさっき、庭でこの花を摘んでくださっていたのですか？」

「ああ。気付いていたんだね」

照れたようにメイナードが笑う。

「疲れていた君に、少しでも元気を出してほしくて」

メイナードが自分のためにとわざわざ花を摘んでくれたことが、フィリアには何より嬉しかった。小さな花束を、フィリアはそっと胸に抱き締める。

「ありがとうございます、メイナード様」

フィリアはその後、メイナードから贈られた花を花瓶に飾った。

いつもメイナードが自分を見ていてくれることも、温かな想いも、彼が摘んでくれた花から伝わってくるようだ。

可憐な花を眺めながら、フィリアは身体の奥から元気が湧いてくるのを感じた。

© 瑪々子／風濤社　NOT FOR SALE